

横 手 の ち 力 ラ



おもてなし武将隊 清原紅蓮隊のみなさん。



おもてなし武将隊 清原紅蓮隊 隊長 平田 孝太さん

ひらた こうた / 44歳 / 横手地域在住
横手高校卒業後、関東学院大学へ進学。卒業後横手に戻り団体職員を経て、家業の「喫茶ひらた(横手市)」を継承。平成11年に開催された横手市民ミュージカルに参加したメンバーが中心になり「劇団ほじなし」を結成し、初代団長を務める。
(清原紅蓮隊 公式ホームページ)
<http://gurenkiyohara.wixsite.com/kiyohara-gurentai>
(Facebook)
<https://ja-jp.facebook.com/kiyoharagurentai/>

後三年合戦で地域活性化を担う おもてなし武将隊

平安時代末期に横手市と美郷町を舞台に繰り広げられた後三年合戦を、殺陣などのパフォーマンスを通して紹介しているおもてなし武将隊「清原紅蓮隊」。平成24年3月に結成し、横手市を拠点に活動を行っている。

演者も楽しみながら活動を継続

隊の母体である「劇団ほじなし」には現在15名の劇団員が所属。そのうちの10名が清原紅蓮隊としても活動している。「もともと劇団でチャンバラを行っていたので、その舞台を見た横手市職員から依頼を受けて隊が誕生しました。最初は市の主導でしたが、現在は自主的に活動を行い、横手市と美郷町の公認を受けてPR活動を行っています」と、孝太さん。毎月第3日曜日、秋田ふるさと村で開催している定期おもてなし公演のほか、年に40〜50回、出陣している。「PRしなければいけないという以前に、演じることが楽しくて仕方ないんです。活動モットーは3つ。お客様に楽しんでいただける舞台をつくること。自分たちも楽しむこと。そして、多くの人に後三年合戦に関心を持ってもらえるきっかけとなる活動を行うことです」。

後三年合戦の認知度を高めたい!

結成から6年、孝太さんがこれまで活動して感じるのは後三年合戦



定期公演では子どもから年配の方まで幅広い年齢層の観客が演舞を楽しんでいる。ユーモアを交えた歴史説明やクイズを出題し、笑いに包まれる場面も。しかし、殺陣が始まるや雰囲気は一変。演者の真剣な眼差しに観客の熱気も最高潮に達した。舞台が終われば最後の一人が帰るまで丁寧に対応する姿が印象的だ。

■劇団ほじなし 東京公演開催
清原紅蓮隊のメンバーが所属する劇団ほじなしが東京で開催される舞台に参加します。
「家康〜流れ去るものはやがてなつかしき〜」
①6月2日(土)19:00~
②6月3日(日)12:00~
会場/梅ヶ丘BOX(東京都世田谷区梅丘)
※詳細は劇団ほじなしのホームページを参照ください。
(劇団ほじなし 公式ホームページ)
<https://hojinasi.wixsite.com/hozzy-and-nancy>

心を込めたパフォーマンスでおもてなし

すべては愛する横手の活性化のため。「地域の活性化に役でも二役でも関わられるような団体になるため、まずは定期おもてなし公演に来てくださるお客様に公演一公演でのパフォーマンスを心を込めて行っていきます。それが地域活性化の一助になると信じています」。

月一回の定期公演のほか、年に一度、全国各地の武将隊を招き「武将隊フェスティバルin横手」を開催。このイベントは県内外から多くの人が演舞を見に横手市を訪れ、交流人口の拡大にもつながっている。「読者のみなさん、帰郷する際はぜひ定期おもてなし公演を開催する第3日曜日に!みなさんの身近で開催するイベントにも呼んでください!」と孝太さん。地域に密着した武将隊の熱きステージを見に来ませんか?

おらの元氣のもと



民謡歌手 高橋 一郎さん

たかはし いちろう / 68歳 / 山内地域在住
平成16年 生保内節全国大会優勝を皮切りに、秋田県内で開催される13大会のうち12大会で優勝。平成23年 日本民謡協会民謡舞全国大会・中年部優勝、同年 日本郷土民謡協会民謡舞全国大会・シニア部優勝。平成29年 第57回郷土民謡舞全国大会・シニア編2部 優勝ほか20回以上の全国大会優勝を誇る。

民謡が好きだから これからも歌い続けたい

「わたしの城下町」がヒット曲となった昭和46年、歌に覚えのあった一郎さんは市内路線バスの運転手として勤務しながらアマチュア歌謡祭に出場。東北大会で優勝した。「でも、全国の壁は厚くてね。会社を辞めてまで歌に専念する選択はできない。だから趣味でたしなむ程度に歌い続けていたよ」。そんな一郎さんが45歳を過ぎて民謡と出会う。初めての民謡大会では100人中10番目の成績だったが、民謡酒場とも呼ばれる民謡同好会のおさらい場所、山内地域にある料理店「千代喜久」で「もうちょっと手えかげればいいじゃないか」と会員に言われたのがきっかけで、二代目浅野梅若(※)に師事。その後、平成16年に生保内節全国大会で優勝した。「夢じゃないかと思っただって、優勝旗を持って歌う自分の姿を何度夢に見ていたか。うれし涙が流れて喉がつかえて、声が出ないんだ」と当時のことを振り返り顔をほころばせた。

「世を超えて共感を呼ぶ民謡の力」
一郎さんは、シンガーソングライター高橋優さんの父親。4年前には秋田市内で開催された高橋優さんのライブにサプライズゲストとして登場した。しかし当初は参加を断り続けていたという。「優の事務所の方から民謡を歌ってくれないかと熱心に言われたけど、やっぱり恥ずかしくてね。優にも内緒の企画だったんだよ。私が出るのは場違いというか、息子のファンの前で父親が民謡を歌いだしたらライブの雰囲気壊してしまうかもしれないと不安もあった」と、登場には後ろめたさもあったようだ。が、いざステージに立ち歌い終わるとその反響は大きく、「民謡ってスゴイ!」「CDはありますか?」と若い世代からも問合せがあり驚いたという。

チャレンジ精神を 忘れずにいたい

今後の夢をうかがうと、「夢って、この歳だしなあ。家も建てたし、ただ、秋田民謡の本荘追分大会だけ優勝したことがないから、その大会で優勝してな。まあ正直、優勝できるかよりチャレンジ精神を忘れずに民謡に取り組み続けていぎでな」。これからもさまざまな民謡にチャレンジしながら大会での優勝も狙っていくという。「年齢に負けずまだまだ歌い続けるよ。みなさん、どこかのステージでお会いしましょう。まあ私のことよりも息子高橋優のことを応援してやってください。よろしくお願ひします」と、深々と頭を下げた。

依頼があればどこへでも歌を届けにいきたくと声を弾ませる。「民謡が好きだから」とシンプルだけど揺るぎない元氣のもとが、歌い続ける原動力になっている。
※日本民謡名人位。初代浅野梅若は民謡歌手で三味線奏者だった。



「秋田民謡」高橋一郎
1,620円(税込)
秋田おばこ節、秋田追分、生保内節など全14曲を収録。高橋一郎が秋田民謡を歌い継ぐ。
【読者プレゼントあり!】